

学術論文

# 保育の表現技術（音楽）の指導法についての研究

－ 読譜 －

藤田 桂子

A Study of Teaching Method for Expressing Technology for Music  
in Early Childhood Education

－ Score Reading －

FUJITA Keiko

## 1. 緒言

保育者養成校での基礎的な音楽指導は、主にピアノ奏法の指導、歌唱指導、それを合わせた「弾き歌い」と呼ばれる自身で伴奏をしながらの歌唱、という3つのカテゴリでおこなわれる場合が多いと考えられる。本学においても初年度前期の授業では、ひとコマの時間を2分割して、ピアノの個人指導（毎週）と音楽理論または歌唱の指導（実施授業のうち半数回ずつ）をおこなっている。学生は90分授業のうち45分はピアノ、残りの45分で歌唱、または音楽理論の講義を受け、初年度の後期にはピアノの課題に加えて「弾き歌い」の課題へと進んでいく。

本来、音楽の学習は十分な時間をかけ、少しずつステップアップしていくべきものである。しかしながら保育者養成は音楽の専門家養成とは異なり、指導に使うことのできる時間は非常に限られる。これは致しかたないことではあるが、将来保育者となり、幼児の前で模範となる演奏をおこなう立場になろうとする学生にとって、その演奏能力が重要であることは言うまでもない。教員にはこうした学習環境の中で効果的に学生の技能を高めていく指導が求められているといえる。

先行研究をみると、養成校における音楽指導の中で「読譜」に対する苦手意識や困難感がピアノの学習に対して消極的になる原因であり、特に音楽初心者についてはきめ細やかな指導が必要であることがわかる。諸井（2016）は、「読譜が容易にできるかそうでないかがピアノ学習に前向きになれるかそうでないかに大きな影響を与えている。（中略）読譜に時間がかかる＝ピアノ学習者が面倒だと思ってしまうようになってくると考えられる。」<sup>1)</sup>と問題を提起し、野口ら（2015）は、「学生の困難感に教員が気づき、ピアノを弾くための諸能力について考え、その一つひとつについて、それに特化した簡単なトレーニングを順序よく与えることで、初心者学生のピアノ学習が変わるのではないだろうか。（中略）初心者のピアノ学習において、きちんと

した読譜力をつけさせることは絶対に避けては通れないことである。」<sup>2)</sup>と述べている。まさしくここに問題が存在しており、なんらかの方策を講じることが求められる。そこで筆者はこどものための音楽実践に必要な多くの技能のうち、本研究では特に楽譜を読み解く力「読譜力」の向上に焦点を当て、指導法の一試案を実践した。本稿ではその結果を示して考察をおこない、成果と今後の問題点について明らかにする。

## 2. 読譜

読譜とは、「譜に書かれた曲を、譜面通りに演奏したり歌ったりできるようにすること。譜読み」のことである<sup>3)</sup>。丸山（1994）は、読譜という行為を、①楽譜に書き表された音符や諸記号を読む、即ち名称がわかり意味・概念を知ること、②楽譜を見て音楽として表現（視唱または視奏）すること、③楽譜を読むことによってその楽譜が表現する音楽の内的表象（internal realization）を得ること、と定義している<sup>4)</sup>。読譜の力を向上させるための指導、研究は数々おこなわれており教材も多く出版されている。教材では単純に音の名称を答えるものから、初見視唱、または視奏まで幅広い難易度のものがあり、学習者の目的に応じて選択肢は多い。

養成校で初めてピアノの学習をする学生にとっては、読譜に取り組むということとは①を指すといえる。そのうえで②の表現をおこなうことができ、さらには③の内的表象を得る、即ち楽譜を読んで音楽を分析し、イメージを持って表現することが可能となる。学生が学習する音楽は再現芸術を基本としており、そのためには楽譜を文章のように、音符を文字のように読み解くことが非常に重要となる。本稿では学生が取り組む読譜の概念を①に絞り、音符を見て音名を答える力を育成するための学習についての可能性を探ることとする。

## 3. 問題の所在

本学の音楽の授業では、新入生に対し第1回目の授業ガイダンスの際に音楽暦に関するアンケート調査をおこなっている。質問紙により高校卒業までの音楽経験について尋ね、鍵盤楽器の学習経験の度合いによってレベルを分けて、授業における課題の難易度に差を設けている。その詳細については本稿の論旨から外れるため述べることを控えるが、全入学生のうち、ピアノ初心者は毎年ほぼ半数を超える（平成29年度入学生では55.4%）。表1に平成29年度入学生の2年履修、3年履修ごとのレベル分け割合を示す。平成29年度入学生の特徴として、特に3年履修クラスで初心者が非常に多く、7割を超える（73.5%）ことがあげられる。

このような現状の中で、学生は2年または3年間で就職試験に対応できる演奏能力を身につけなくてはならない。ちなみに保育職の就職実技試験において音楽実技を課す園や自治体は9割を超える。すなわち学生は2年ないし3年間で就職実技試験に対応できる力をつけることが必要であり、教員には、1週間に1回という音楽技能科目の授業内で効率的に技能を向上させる指導をおこなう、という大きな課題が課されている。

音楽初心者の学生は押しなべて楽譜を読む力がないのは当然である。そのため、曲を耳から

の聞き覚えで演奏してしまいがちであり、試験の際にも一旦演奏がとまってしまうと、たとえその箇所が曲の終わりがけであっても再度最初から弾き直してしまう様子が見受けられる。このようないわゆる丸覚えでの演奏は、保育の現場で子どもの音楽表現を援助する際には通用しない。途中からであっても楽譜を追って演奏できる、既習の曲でなくても音符を読んで演奏することのできる力をつけることが必須であろう。学生にとって楽譜を読むことは演奏するために欠かせない作業であり、たとえ初心者であっても楽譜ありきでの学習が必要である。

表 1 平成 29 年度保育専攻入学生の音楽経験によるレベル分け

	2年履修(40名)		3年履修(34名)		全体(74名)	
	人数	割合	人数	割合	人数	割合
A(初心者)	16	40.0%	25	73.5%	41	55.4%
B(1～数年程度の経験者)	20	50.0%	2	5.9%	22	29.7%
C(上級者)	4	10.0%	7	20.6%	11	14.9%

#### 4. 研究の方法

研究は実践的方法をとる。指導初回と最終回と同じ読譜テストをおこない、指導の効果について検証した。同様に初回と最終回に質問紙によるアンケート調査を実施し、学生が自身で考える自分の読譜力に対する変化や指導を受けての記述について考察した。さらに授業内での指導でおこなった読譜課題の達成結果から読み取れる読譜力の変化についても検討した。

##### 4.1 調査

###### 4.1.1 読譜テスト

指導前と指導後に同じ問題を用いて読譜のテストをおこなった。(図1)

- ・実施日：平成 29 年 4 月 18 日・19 日、平成 29 年 7 月 4 日・5 日
- ・対象者：平成 29 年度保育専攻入学生 50 名（欠席し 1 回のみを受験学生は合計から除外）
- ・方法：リズムのない全音符についてト音記号、ヘ音記号ともに 10 問ずつ階名（イタリア音名）で回答する。制限時間は学習前は 1 分間、学習後は 30 秒とした。音域は、ト音記号は〔ロ～2 点イ〕、ヘ音記号は〔い～1 点ハ〕とした。

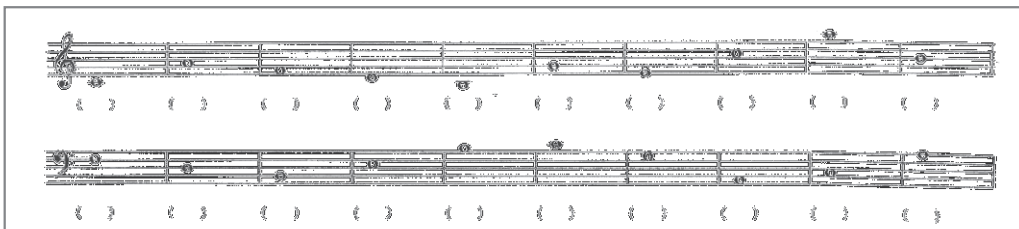


図 1 読譜力テスト


## 4.1.2 質問紙調査

**読譜に関するアンケート**

\_\_\_\_\_ クラス 番号 \_\_\_\_\_ 氏名 \_\_\_\_\_


1. 音符を見て、あてはまる( )の部分に○を書いてください。

ト音記号(高音部記号)



①の部分 ( )見てすぐ読める ( )考えれば読める ( )読めない  
 ②の部分 ( )見てすぐ読める ( )考えれば読める ( )読めない  
 ③の部分 ( )見てすぐ読める ( )考えれば読める ( )読めない  
 ④の部分 ( )見てすぐ読める ( )考えれば読める ( )読めない

へ音記号(低音部記号)



①の部分 ( )見てすぐ読める ( )考えれば読める ( )読めない  
 ②の部分 ( )見てすぐ読める ( )考えれば読める ( )読めない  
 ③の部分 ( )見てすぐ読める ( )考えれば読める ( )読めない  
 ④の部分 ( )見てすぐ読める ( )考えれば読める ( )読めない

2. 読譜力(音符を読む力)を向上させたいと思いますか。  
 ( )思う ( )思わない

3. 2.で「思わない」と答えた人の理由はなんですか。  
 ( )すでに読譜力があるから ( )その他 [ ]


図 2-1 指導前アンケート

**読譜に関するアンケート**

\_\_\_\_\_ クラス 番号 \_\_\_\_\_ 氏名 \_\_\_\_\_


1. 音符を見て、あてはまる( )の部分に○を書いてください。

ト音記号(高音部記号)



①の部分 ( )見てすぐ読める ( )考えれば読める ( )読めない  
 ②の部分 ( )見てすぐ読める ( )考えれば読める ( )読めない  
 ③の部分 ( )見てすぐ読める ( )考えれば読める ( )読めない  
 ④の部分 ( )見てすぐ読める ( )考えれば読める ( )読めない

へ音記号(低音部記号)



①の部分 ( )見てすぐ読める ( )考えれば読める ( )読めない  
 ②の部分 ( )見てすぐ読める ( )考えれば読める ( )読めない  
 ③の部分 ( )見てすぐ読める ( )考えれば読める ( )読めない  
 ④の部分 ( )見てすぐ読める ( )考えれば読める ( )読めない

2. 今回の学習で読譜力(音符を読む力)が向上したと思いますか。  
 ( )とてもそう思う ( )ややそう思う ( )どちらともいえない ( )思わない

3. 今回の読譜の学習についての感想を書いてください。  
 [ ]

図 2-2 指導後アンケート

指導前と指導後に質問紙を用いて学生の読譜に対する自身の認識と読譜の学習について調査した。ト音記号、へ音記号とも、①下第二線までの加線を用いた音域。②下第一線から第三間まで。③第四線から上第一間まで。④上第一線から上第二線までの加線を用いた音域。の4つの部分に分け、「見てすぐ読める」、「考えれば読める」、「読めない」、からの選択設問とした。また、指導前には読譜力を向上させたいか、指導後には読譜力が向上したと思うかについて聞き、指導後に限り学習に対する感想を記述で求めた。(図2-1・2)

## 4.2 指導

保育の表現技術「音楽Ⅰ」の授業内で、グループ指導のはじめの3-4分を用いて、11回にわたり読譜課題を時間内に解くという方法で学習をおこなった。

## 4.2.1 内容

- ・実施日：平成29年4月18日から7月5日までの「音楽Ⅰ」の授業内
- ・実施回数：11回
- ・読譜プリント：1回につきト音記号2枚、へ音記号2枚の計4枚（最終回のみ各1枚）のプリントを、1枚につき30秒で回答する。問題は基本的には単音を

階名（イタリア音名）で答えるものであるが、全42枚のうち5枚のみ曲の形式で出題した。これは演奏の際に必要なとされる読譜の状況に近づけるためである。制限時間内に回答できなかった場合は、最後に答えた音符の位置に『J』（おわりカギカッコ）を書き、残りは時間に関係なく宿題として次週に提出するように指導した。読譜プリントの音域と設問数を表2に記す。

#### 4.2.2 倫理的配慮

愛知江南短期大学個人情報の保護に関する規定第3章「個人情報の取り扱い第13条」に基づき、アンケートに回答した学生に対し研究の趣旨を説明し、アンケート上の記述等について、氏名等を伏せて開示することへの同意を得た。

表2 読譜プリントの設問数と音域

		ト音記号			ヘ音記号		
		設問数	音域	形式	設問数	音域	形式
1回目	1枚目	20	1点ハ-1点ホ		20	ハ-ホ	
	2枚目	20	1点ハ-1点ホ		20	ハ-ホ	
2回目	1枚目	20	1点ハ-1点ヘ		20	ハ-ホ	
	2枚目	20	1点ハ-1点ト		20	ハ-ヘ	
3回目	1枚目	20	1点ニ-1点イ		20	ハ-ト	
	2枚目	20	1点ホ-1点ロ		20	ハ-ト	
4回目	1枚目	20	1点ニ-1点ロ		20	ニ-イ	
	2枚目	20	1点ホ-2点ハ		20	ハ-イ	
5回目	1枚目	20	1点ハ-1点ロ		20	ニ-イ	
	2枚目	20	1点ホ-2点ハ		20	ハ-イ	
6回目	1枚目	27	1点ハ-2点ハ		28	ハ-ト	
	2枚目	20	1点ハ-2点ハ	曲形式	20	ハ-ト	曲形式
7回目	1枚目	25	2点ハ-2点ホ		27	ハ-ロ	
	2枚目	27	2点ハ-2点ヘ		27	ハ-1点ハ	
8回目	1枚目	20	1点ト-2点ト	曲形式	20	ハ-1点ハ	曲形式
	2枚目	25	2点イ-3点ハ		25	1点ハ-1点ヘ	
9回目	1枚目	28	2点ハ-3点ハ		28	ヘ-1点ヘ	
	2枚目	25	ト-1点ハ		28	ヘ-1点ヘ	
10回目	1枚目	28	ト-1点ヘ		23	ヘ-ハ (※)	
	2枚目	28	ト-1点ト		28	ヘ-ハ (※)	
11回目	1枚目	20	ト-1点ヘ	曲形式	28	ヘ-ヘ (※)	

※ 10回目から11回目のヘ音記号の音域の部分で左側に示した最低音はひらがなのへ（下第一間）、11回目の右側に示した最高音はカタカナのへ（第四間）である

## 5. 結果

読譜テスト、質問紙によるアンケート、指導の内容を以下に示す。

### 5.1 読譜テスト

ト音記号、ヘ音記号ともに10問の設問中、指導前と指導後の音符ごとの正答者数を図3に、同様に合計の正答者数を図4に記す。

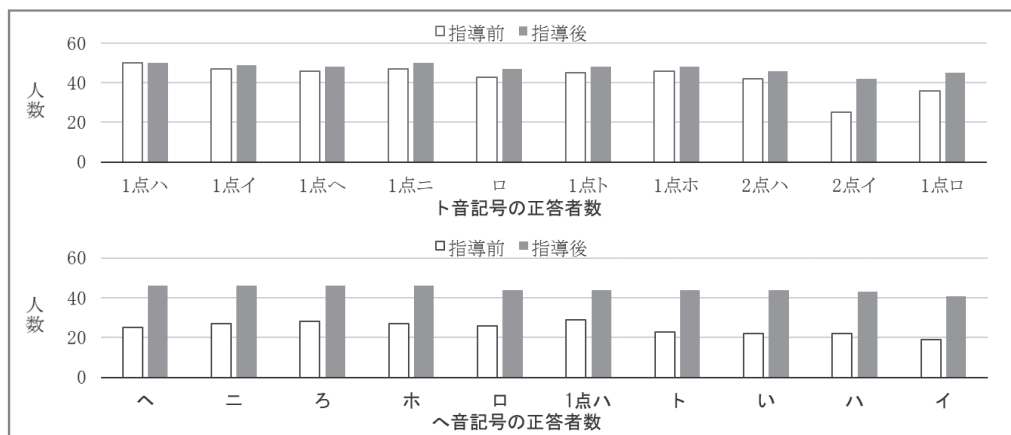


図3 読譜テスト 音符ごとの正答者数

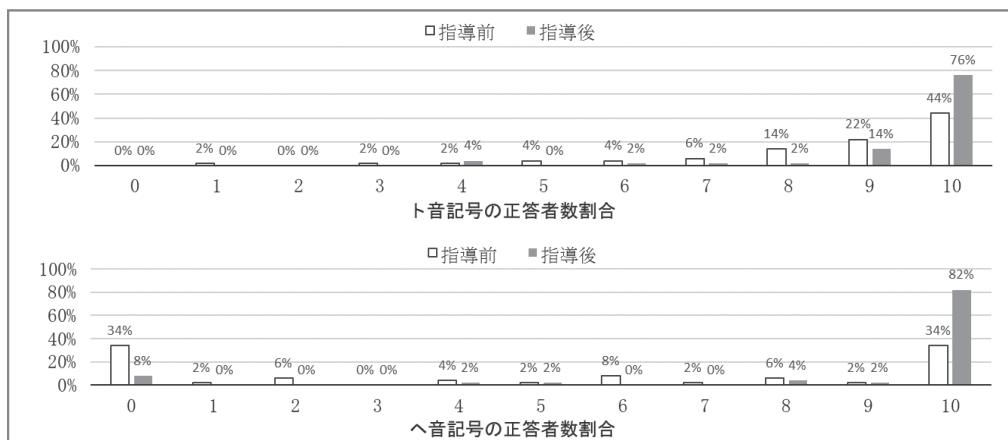


図4 読譜テスト 合計の正答者数割合

読譜テストは、同じ問題を学習前には1分間でおこない、学習後は30秒で実施した。これは11回の学習の様子を見るうち、学生にとって10問を1分で答えることは容易すぎるのではないかと考えたためである。にもかかわらず図3にあるように学習前よりも全問を通して正答者数が増えており、音別の正答者数をみていくと、ト音記号ではその差異は難易度が高いと思われる最高音の〔2点イ〕について最も多く、正答者は学習前の25名から学習後では42名に増加している。さらにヘ音記号ではどの音も飛躍的に正答者数が増え、学習前のテストでは最も正答者が多かった〔1点ハ〕を読んでいた学生は29名であったが、学習後には44名であつ

た。設問合計の正答者数割合（図4）を見ても、やはりへ音記号において顕著な差がみられる。ト音記号では学習前に10問すべて正答した学生は44%であったのに対し、学習後には76%となり、同様にへ音記号についてみると正答者の割合は34%から82%と倍増している。しかしながらへ音記号について学習後でありながら1問も正答できなかった学生が8%（4名）いたことは、学習をおこなった後もへ音記号への苦手意識を持つ学生がいるということであり、今後の重要な課題である。

## 5.2 アンケート

指導前と指導後のアンケート調査の結果を表3に示す。（記述を除く）

表3 読譜に関するアンケート（数字は人数）

		見てすぐ読める		考えれば読める		読めない	
		指導前	指導後	指導前	指導後	指導前	指導後
ト音記号	①の部分	18	23	26	27	7	0
	②の部分	36	41	14	9	1	0
	③の部分	32	29	17	21	2	0
	④の部分	18	19	23	36	10	0
へ音記号	①の部分	7	7	29	41	15	2
	②の部分	12	19	31	30	8	1
	③の部分	10	25	25	24	9	1
	④の部分	15	15	22	22	14	1

		指導前			指導後
読譜力を向上させたい と思いますか	思う	51	今回の学習で読譜力が 向上したと思いますか	とても思う	31
	思わない	0		やや思う	18
				どちらともいえない	1
				思わない	0

読譜に関するアンケートは、学習前後に同じ音域について自分がどのくらい読めると思うか、という意識調査としておこなった。4つの部分に分けた音域のうち、どの音域について見ても「読めない」という学生は学習後に減少しており、ト音記号では①から④のすべての部分で学習後に「読めない」と回答した学生が一人もいなかったことは特筆できよう。しかしながらト音記号の③の部分では、学習後に、「見てすぐ読める」と回答した学生は32名から29名に減少している。これは実際に読譜の学習をおこなったことで、学生が自分自身の読譜力について正しい認識を持つに至ったとも読み取れる。ト音記号の①と④の部分の五線内に収まらない音域について、すべて「見てすぐ読める」「考えれば読める」の回答数が増え、「読めない」の否定的回答数が減少していることは、学生が自身の読譜力に対し、一定の自信を持つことができたと感じた。へ音記号をみると、「見てすぐ読める」、「考えれば読める」の回答は、指導前と指導後の比較ですべての音域について増加しているもののさほど大きな差は見られない。しかし、「読めない」の回答が指導後には顕著に減少していることから、やはり学生は自身の読譜力が向上した、と考えていることがわかる。

また、学習前アンケートでの、読譜力を向上させたいと思うかという設問に対しては、回答

者全員が「させたい」と答えており、今回の学習によって読譜力が向上したと思うかとの学習後の設問には「とてもそう思う」「ややそう思う」と肯定的な回答をした学生が49名（98%）であり、「どちらともいえない」が1名、「思わない」と答えた学生はいなかった。これらの結果から、学生は読譜の学習をしたことにより自身の読譜力に対する自信をつけ、読譜力は努力によって向上するという意識を持ったといえる。さらに学習についての感想を自由記述する設問から一部をみていくと、〈今では自信を持って読めるようになった〉〈前よりもすぐに読めるように上達した〉〈少しずつ難しくなっていくにつれてできなくなってくるのがすごく悔しかった〉〈「読めない」から「早く読める」「読める」の段階に変わってきた〉〈知らない曲でも弾いてみて歌詞を歌うことができるようになった〉〈だんだんパッとみてわかる音符がふえた〉〈へ音記号が苦手ですぐ読めなかったところが毎週読譜をすることですぐ読めるようになった〉〈考える時間が短くなった〉〈高い音は苦手としていたが、今回の読譜を毎回したおかげでよめるようになった〉などの回答があり、自身の読譜の力がついたことを感じている学生が多くいることがうかがえる。中には、〈見てすぐに読譜ができないとピアノがすぐに弾けないのでよかった〉〈ピアノを弾くときに音符の名前を書かなくてよくなった〉<sup>\*1</sup>など、ピアノの演奏に直結する学習効果を感じている学生の姿も見られた。これらのことは読譜の学習がピアノの演奏に大きくかわり、読譜力が向上することによって演奏の技能も向上に向かうことができる、という相乗的な効果が期待できることを示唆したといえよう。<sup>\*2</sup>

### 5.3 指導

授業内での読譜指導では、本来音楽理論や歌唱の学習にあてられる時間を使う必要があったため、可能な限り短時間での方法が求められた。そこで、毎週授業時間の初めに1枚30秒で回答する読譜課題4枚に取り組み、30秒で回答しきれなかった学生については宿題とするという、全体で3分ほどの学習を行った。ただし、読譜は正確さと速さの双方が求められるものであるため、最後まで進めることのできなかった学生は、制限時間内に回答できた最後の問題の箇所には『J』（おわりカギカッコ）を書き、残りは時間を計ることはせずに持ち帰り、次の授業で提出するように指導した。全対象学生の制限時間内での回答数、正答数は毎回記録し、分析の一助とした。

また、読譜課題は簡単なものから徐々に難易度が上がるよう選択した。4枚のうちト音記号の音符を読むものが2枚、へ音記号が2枚とし、ト音記号の問題は学生に最もなじみがあると思われるいわゆる真ん中のド〔1点ハ〕を基準に音程を3度、4度、6度と広げていき、11回の学習の中にオクターブ、加線による高音、低音など、1年生前期のピアノ指導での課題に使用する音域に近づくように留意した。へ音記号の問題においては、ト音記号に比してさらに学生が苦手意識を持つものと仮定し、5回目までは5度以内の音域で出題し、その後少しずつ広げていくこととした。また、問題数も1回目から5回目までは20問、6回目からはそれ以上に増やした（表2）。他には単独で音符を読むものだけではなく、後半の指導では曲の形式で



書かれた、演奏時に必要な読譜に近いものも用いた。

学生は、はじめのうちは指導中に、あせって書けない、考えているとすぐに時間がきてしまうなどという感想を口にし、取り組むことに対して消極的な姿も多くみかけられたが、毎週おこなううちにこの学習方法に慣れ、集中して解く様子がみられた。個人の正答数の変化をみると、やはり難易度や問題数が上がるにつれて最後まで回答しきれない傾向はあったものの、初心者の学生であっても誤答は少なく、じっくり音符を読むことはできていた。初心者が73.5%という3年履修の学生は、特にへ音記号に苦手意識があり、指導の後半では質問数の半分まで回答できないという者もいたが、学習前の読譜テストではへ音記号を1問も正答できなかったにも関わらず、学習後のテストで10点満点を取った学生が7名おり、指導の効果を実感することができた。

## 6. 考察

本実践は、実際の指導時間は非常に短く、学生にとっては授業の始まりの際にほんの短時間音符を読む訓練をした、という程度の認識であったと思われる。しかしながらその効果は予想を越え、読譜力の向上、読譜に対する意識付けともに有意義な結果が得られた。

読譜力の調査、読譜に対する意識調査、指導について考察した結果、筆者は短時間であっても継続した学習を行うことは読譜力を向上させるために有効である、との結論を得た。保育者養成における音楽の授業に時間的な余裕がなく、非常に多くのことを学ばせる必要がある中においても、その基礎的学習には、楽譜を読み込んで演奏として再現するために、音符を読み取る力が必要不可欠である。しかし実際には、幅広く音楽を学ぶ上で読譜のみを学習するという時間をとることが難しく、授業の中ではピアノ指導の際に簡単に説明して自分で読譜するように指導したり、音楽理論の授業内でも音符の定義について指導するのみで特に読譜について細かく言及することがない、というような現状がある。ピアノ指導に用いられる教材は、本学のみならず多くの養成校で1年次のピアノ課題としている「バイエル」という曲集で、読譜力向上のための課題として捉えた場合難易度が高く、音楽初心者が自分ですぐに楽譜を読み込むには無理があるといえる。また、音楽理論の授業では、音符や楽譜の定義は理解したとしても、「実際に見て音がわかる」力をつけることはできまい。ましてや高等学校卒業までの音楽教育で読譜の力をつけることができるとは考えにくい。筆者は本実践をおこなった結果、音楽初心者として入学してきた学生が、たとえ短い時間であっても読譜のみに特化した指導を受けることは、音符を読み取る力を確実に向上させる、という手ごたえを感じた。今回のような学習が、音楽の表現技術を学ぶ学生が確実に向き合わなければならない「楽譜」というものを、「全くわからないもの」から、「理解できるもの」へと変えていく一助になることは間違いないといえるであろう。

ところで、読譜の学習と並行して学生は毎週ピアノ演奏のための指導を受けており、ここでも読譜力が養われていることは当然である。すなわち必ずしも本指導のみが学生の読譜力向上

に寄与しているとは言えない。しかし、演奏のための読譜に加えて「読譜のための読譜」の学習を行ったことは、養成校の学生にとっての本来の目的である、「こどもの前で演奏するための表現技術の向上」を達成するための手助けになっているといえるのではないかと考える。

音符一つひとつを読むことができて、音楽とは音、リズム、強弱など、多様な要素からなっており、そのすべてを楽譜から読み取ることが演奏のために欠かすことのできない大切な技能となる。まずその一歩として音符を読む力が必要なのであり、本研究の目的である読譜に特化した指導の一試案を示し考察したことは、保育者養成校での音楽教育の可能性について探るといふさらに大きく重要な目的へのひとつのステップであるといえる。

## 7. 結語

本指導は、音楽経験の少ないピアノ初心者が楽譜を読めないために演奏が困難になっている、という現状を、読譜に特化した指導という方略を用いて改善することができないであろうか、という思いから始まった。短い時間であっても継続することで力がつくのではないかと仮定して実践したが、実践を振り返ると、学生たちは筆者の予測を超えて読譜力を向上させた。特に、複数のピアノ初心者の学生が学習後に、はじめは1問も答えられなかった問題で満点をとるようになった、という結果は、これを如実に表していると言ってもいいのではないであろうか。また、学習後アンケートの自由記述部分では意外にも音楽経験者が〈自分の読譜力があがりうれしかった〉〈ブランクがあり自信がなかったが取り戻せた〉などと回答を寄せていた。このようなことから今回の読譜指導には一定の効果が認められたと考えている。

一方で、読譜に対して最後まで苦手意識を克服できない学生もあり、学習後のアンケートの自由記述部分に、〈難しすぎる〉〈へ音記号は無理〉と書いた学生がみられたことは、時間の制限があるためにより難しさを感じた可能性も考えられ、今後指導法を模索していく上での課題のひとつと捉えている。<sup>\*2</sup>

また、学習の継続性の問題も存在する。1年次前期は集団指導の時間があり、一斉に読譜学習に取り組むことが可能であったが、後期からは1クラスを2ないし3グループにわけ、担当教員ごとに90分の授業をおこなうことになるため、本実践のような指導の形態をとることは難しい。学習を継続することで一層力がつくことは明白であるので、授業内での指導に限らず授業外学習として位置付ける可能性も探る必要がある。

緒言に述べたように、読譜とはただ音符の名称が理解できることのみではない。楽譜に書かれている様々な作曲者の意図を読み取り、分析し、理解するという作業であり、その先によりやく音楽表現が可能となる。保育者という明確な目標を持って学習する養成校の学生は、保育現場に出るまでに読譜の先の表現までたどり着かなくてはならない。今回の読譜指導はそのほんの一歩を援助するものにすぎず、こどもの豊かな音楽表現を育むため、学生自身が表情豊かで伸びやかな演奏の技能を身につけることが最終目的であることはいふまでもない。読譜という狭義な学習をひとつの手がかりとして、感性豊かな音楽表現に向かい学生一人ひとりが努力

していくことに期待するとともに、保育者養成における音楽教育のあり方、その具体的な方策について今後さらに検討していくこととしたい。

## 脚注

- 
- \* 1 楽譜上の音符の上、または下に階名を書くことを意味していると思われる。
  - \* 2 〈 〉内はいずれも自由記述の原文抜粋

## 引用文献

- 
- 1) 諸井サチヨ (2016)「保育者養成校での『弾き歌い』指導に関する一考察 ～学生のピアノ技能に関する実態調査を中心に～」『淑徳大学短期大学部研究紀要第 55 号』 p.87
  - 2) 野口美乃里・中島加奈 (2015)「ピアノ学習に必要な諸能力に関する研究 I - 譜読み力に着目して -」『西九州大学短期大学部紀要第 45 号』 p.34・pp.44-45
  - 3) 松村明編 (2006)『大辞林第三版』三省堂
  - 4) 丸山太郎 (1994)「音楽的読譜形成に向けた読譜指導法について (試論)」『東京学芸大学紀要第 5 部門, 芸術・健康・スポーツ科学 Vol.46』 pp.36-37

## 参考文献

- 
- 1 安藤恭子・藤田桂子・森久見子 (2012)「保育表現技術 (音楽 I) - 読譜 2 -」『名古屋女子大学紀要第 58 号 人文・社会編』 pp.239-249
  - 2 森久見子・藤田桂子・小栗美砂・河合玲子・久保田道子 (2014)「保育表現技術 (音楽 I) - 読譜 4 -」『名古屋女子大学紀要第 60 号 人文・社会編』 pp.145-157
  - 3 岩口摂子 (2008)「保育者養成における音楽教育の基礎研究 2 - 簡易読譜力調査を通して -」『相愛大学研究論集第 24 巻』 pp.191-213
  - 4 吉田直子 (2016)「幼児教育者養成課程における読譜力養成 - モデルパターンを用いた実践から -」『学校音楽教育研究 20 (0)』 pp.239-240
  - 5 藤平昌寿 (2015)「音楽教育における視覚的教材導入による読譜の可能性について」『日本デジタル教科書学会年次大会発表原稿集 4 (0)』 pp.27-28
  - 6 岩佐明子・富田英子・鳥丸佐知子 (2015)「保育者養成校における音楽教育についての調査研究 - 音楽基礎知識及び鍵盤楽器の練習量と演奏技術の観点から -」『京都文教短期大学研究紀要第 53 集』 pp.21-30
  - 7 小池美知子・上村聖子・木村真由美 (2005)「保育者養成における鍵盤楽器指導に関する研究 (3) - 読譜力養成のための指導について -」『今治明德短期大学研究紀要第 29 集』 pp.27-39
  - 8 中山由里 (2007)「ピアノ教育の導入期における授業についての一考察 - ピアノ初心者への講座を通して -」

『九州女子大学紀要第44巻3号』pp.67-81

- 9 内藤雅子（2014）『やさしいトレーニング譜読みチャレンジ1・2・3』株式会社デプロMP